

禪竹の能

——芭蕉に寄せて——

西野春雄

世阿弥の作品研究の、虚実織りませた論も飛び出す人気と花やかさに比べて、やや地味なのが禪竹の作品研究であろう。しかも、禪竹の作品考定に関しては、観阿弥・世阿弥・元雅における『三道』『五音』『申楽談儀』

のような決定的な資料がなく、室町中期以降のいくつかの作者付に頼らざるを得ない。禪竹関係の作者付では、金春系の『自家伝抄』（永正二十一年の間に成立）と観世系の『能

本作者注文』（大永四年成立）が著名であり、ほかに『享保六年金春八左衛門書上』があげられる。これらはいくまでも外部徴証に過ぎないが、『自家伝抄』では32曲を、『能本作者注文』では18曲を、『書上』では23曲を禪竹作としており、いちおうの外枠は作り得る。「江口」「西行楼」など観阿弥や世阿弥の能数曲を禪竹に帰している『書上』はもちろんのこと、他の二書も全面的には信頼できないが禪竹の作品研究はそこにブールされた諸曲の分析から始めねばならない。

現在のところ、三書が共通する、  
賀茂 鍾廬(ツセは古曲) 芭蕉 楊貴妃

の4曲と、二書が共通する曲のうち、

雨月\*小堀\*小督\*千寿\*竜田\*玉葛\*定家の7曲、合計11曲が禪竹作と認められている(『自家伝抄』では\*印の4曲を世阿弥作とし「雨月」については記載がない)。禪竹の定家への傾倒の著しさを、他の作者には見られない『拾遺愚草』からの引用(定家・小堀)など文体上の特色を勘案しつつ、もっとも可能性の高い曲からやや低い曲まで(及び改作)の

五段階に分けて整理を試みられた伊藤正義氏の「禪竹の能」(『金春禪竹の研究』)では、右のうち「芭蕉」をAⅡ禪竹作と信じられるもの、「定家」と「小堀」をBⅡ禪竹作の可能性が高く、禪竹作とみて差支えないものとし、他はCⅡ禪竹作の可能性が高いものになっている(伊藤氏はCに「野宮」も加えておられる)。

しかし、このほかにも『自家伝抄』で禪竹とする曲など、禪竹作の可能性のある作品もすくなくない。それは次の三類25曲である。

(一)『能本作者注文』では世阿弥とする曲  
葵太刀姫 葛城賀茂代主\*源氏供養 空也

志賀忠度 忠信 \*野宮 富士太鼓 松虫

\*印の二曲は『自家伝抄』でも世阿弥の項にもある。  
また『能本作者注文』では「葵(太方懸)」を不明の項にも出す。

(二)『能本作者注文』では不明とする曲

賀茂物狂 清重 西行西住 谷行 鶴若

鶏竜田 早友(碓漕らしい) 和布刈

(三)『自家伝抄』だけに見える曲

かぐや姫 蛙 木引木引善光寺 塵山 桜葉

当願暮頭 盲沙汰 八幡。印は散休曲

伊藤氏はこれらをDⅡ禪竹作の可能性もあるものに一括されておられる(但し「野宮」は除く)。このほかにも『能本作者注文』や『書

上』が禪竹とする「白髭(クセは古曲)」「や「虎送」「西王母」「黒塚」など数曲あるが、可能性は数段落ちるように思われるので今は触れないでおく。

以上を総合すると、結果的に『自家伝抄』を重視する傾向が強いが、これは同書が金春系の作者付であることと、禪竹の項に次のような形の注記が多く、かつ信頼度も低くないことによる。その注記は、

芭蕉観世又三郎所望 蛙春満方へ 玉葛細川殿御所望  
などで、禪竹作32曲中17曲について記されており、禪竹が他座の役者(蛙)の春満は近江猿楽らしい)や後援者の儒めに応じて能を作っていたことを示し、例えば「芭蕉」は禪竹が若い時に観世へ遣わした能の由を伝える

『禪鳳雜談』の記事と符合するからである。

したがって、長門の国の珍らしい和布刈の神事を脚色した特殊な素材の「和布刈」、「古今注」への抛り方の一例を示す「松虫」や「蛙」、

または祈物の「鶏竜田」、憑霊物の「葵」、霊験物の「谷行」など多種多様な能を含むD群にも、相手の注文なり演技傾向に合わせて作ったものも多くあろう。D群全部が禪竹作とは限るまいが、素材面でも趣向でも、かなり幅広かつ混沌としているかに見える禪竹の能の世界は、単純な禪竹像や物差しでは探れないように思われる。

しかし、限られた一面に過ぎないものの、可能性の高い曲(A↪C群)の分析を通して帰納された特色を指摘することはできし、それらを手掛りにすべき点も多い。A↪C群は舞歌二曲を重視した岳父世阿弥の系列に属する曲が過半であるが、これまで禪竹の能の特色としては次の諸点が指摘されている。

① 主題に一貫性を欠き、不明瞭で、ヴェールを通して物を見るようなおぼろな表現が多いこと。

② 曖昧な主題でありつつ特異な情趣——花やかさを蔽い尽くす哀愁感——を現出していること。

③ のびやかさには欠けるが粘り強い文体。漢語調の凝りのある文体も目立つ。

④和歌や連歌に嗜みが深いのはいいが、本歌取りや連歌の付け合いの技法が集中し過ぎて、文体に凝りが多いこと。

このほか、前述した定家への傾倒の激しさに起因する『拾遺愚草』からの引用も他の作者に見られない重要な鍵である。また、禪竹が若い頃から交渉を持った正徹の影響も見逃せない。「賀茂」の前シテ・ツレ登場歌の上ゲ哥の「：初音ふりに行く郭公：」、「夏なき水の川隈：」は、それぞれ『草根集』夏の「聞きあへず人に語れば我為の初音ふりぬる郭公かな」、「山陰やうたの氷室のうたかたも夏なき水の上ぞ涼しき」を響かせているらしい。また、上ゲ哥を連ねる「小塩」や、節付に工夫を見せる「玉葛」などは禪竹の作曲面での技量的一端を物語るものであろう。

さて、これまで述べてきた特色を大方揃え

ていかにも禪竹らしい能なのが「芭蕉」である。芭蕉という特異な植物を擬人化し、世の無常を語らせる能だが、前場の、秋深く物すさまじい景色を背景として、閑居の僧を訪れる女性の、つつましい菩提心を描いて清浄閑寂な境地を展開し、後場は月下に現われた芭蕉の精の玲瓏幽邃な情趣を描き切る。『隣忠秘抄』その他、中入りの重要性を説く伝書が多いのは、中入りを「諸行無常となりけり」という句で終わらせていることによるのだろうし、しかもこの句は終曲の「芭蕉は破れて残りけり」に呼応する。前場と後場をつなぐ中入り間を、絶対不可欠とした脚色は「雨月」や「大会」にも見られるが、アイの発達史上の大きなポイントとされており、また装束や舞事等演出上の問題点もあるが、それらは後考に譲りたい。